1997.12.15
第104号

編集・発行
福島県教育庁
会津教育事務所
加藤征男

編集協力
北会津・耶麻・西沼
地教委連絡協議会
小・中学校長会

学ぶ目的があるから学ぶ

福島県教育庁会津教育事務所次長　齋藤就治

十一月四日から十一月十九日までの十六日間、「平成九年度文部省教員海外派遣団（福島県団）」の一員として、ポーランド、オーストリア二ヶ国の教育事情を視察をさせていただく機会を得た。

両国の学校を訪問してみて一番うらやましく感じられたのは、学習に対する子供達の真剣な、しかも輝いた目である。もちろん、私たちが接している児童生徒の目も、真剣な、しかも輝いた目がない訳ではない。しかし、真剣さや輝きの質が私には違うように感じられた。

ポーランドは、体制の変革があって、まだ、間もない国である。言い換えれば、近代化や文化的な生活を目指した現在進行形の国であり、教育もそれに沿って行われている国である。おのずと教育に当たる者、教育を受ける者どちらも目標がはっきりしており、訪問した学校の児童生徒の学習ぶりにもはっきりとした目的が強く感じられた。

一方、オーストリアは歴史的遺産を生かし、ウィーンだけでなく観光立国で奮闘中の国である。私たちが訪問した「ホテル学校」の生徒も、自己の学習目標がはっきりしており、意欲に満ちた真剣な学習ぶりであった。

両国の子供達の意欲に満ちた、しかも真剣な学習ぶりを参観して、思わず、私たちが接している子供達にこのような意欲や真剣さが見られるかどうか心配になった。

たしかに、両国とも「世界に追いつき追い越せ」の状態にある国である。それに比して、日本は発展をしたが故に目標とする手本がなくなり、新たな目標を模索している状態にあると言われている。そのような状況では、大多数の人々が将来に対し、明確な目標を持つことは難しい事かもしれない。

しかし現状を真摯に見つめ、日本の子供達が将来に対し明確な目標を持ち、意欲的に、しかも真剣に学習できる環境を作ることは、教育に当たる全ての者が、それぞれの立場で真剣に考え、できるところから取り組まなければならない課題であると強く感じさせられた。

学校訪問で見られた生徒指導の機能を生かした授業

生徒指導の機能を生かした授業の重要性は従来より言われてきたところであるが、学校訪問において望ましい具体例が見られたのでそのいくつかを紹介する。

《教師の姿から》

○　子供を「君・さん」付けで呼んでいる。

○　温かな眼差しとともに、
「そう、そうなの」
「うんなるほど、そうか」
「もう少しだよ、がんばってごらん。きっとできる」
「君が考えてやろうとしているそれでいいんだよ」
「先生も君と同じ気持ち（考え）だったよ」
「できたね。わかったね。よくやった」
など、子供が話していることを認めたり、受けとめてやったり共感したりする言葉かけをどの子供にもしている。

○「○○さんの考えをみんなで聞いてあげようね」
「○○さんの考えについて皆さんの考えを聞かせてください」
などの言葉かけをし、子供同士のかかわりあいの場を大切にし、一人一人のよさを伸ばそうとしている。

○　間違ったり、つまずいたり、分からなくなったりして自信をなくしている子供に対して、
「ちょっと残念だったけど大丈夫、心配ないよ」と言葉かけをして安心させるとともに、間違いやつまずきを生かし学習を深めることができるようにしている。

《指導案から》

○　遅れがちなAさん、どんどん先へ進めるBさん、多様な考え方ができるCさんなど、一人一人の違いに対応するための手立てが明記されている。

○　学習したことについて自己振り返りの場が明記され子供自身が成就感を感得できるようにしている。

《教室の環境から》

○　友達の力不足や失敗、勘違いなどを嘲笑したり軽蔑したりする言動がない。

○　掲示物等から一人一人に役割や存在感があることが伺える。

子供が学級の生活に安心と楽しさを感じ、学習への期待感をもち、やる気になる。そうなるまで子供を見捨てたり、あきらめたりすることなく子供にかかわろうとする教師の姿がもっともっと多く見られるようになることを期待したい。

私の実践

自然愛護の心を育てる道徳の実践

会津坂下町立坂下小学校　伊藤徳伸

坂下小学校は、平成六年度から環境教育の研究指定を受けて取り組んできたが、昨年度は、道徳を中心とした、環境保護をテーマに個人研究を進めてきた。

環境保護に関する道徳的価値は、「自然愛護」の精神である。そこでまず、自然愛護に関連する他の教科の単元を選び出し、総合単元的な道徳学習の計画表を作成した。このことにより、道徳の授業のみで終わりがちであった道徳的価値を各教科、特別活動と関連付けながら継続的に、広く深く、児童への定着を図ることができた。

また、昨年の文部省の環境教育講座での研修の成果を生かして、他教科との関連を図った授業を試みた。国語では人間の活動が地球の環境問題を引き起こしたという説明文の教材での学習をし、社会では、工業生産の問題点として公害の学習をする。これらの学習と関連させて、道徳では、自然愛護や環境保護のテーマで授業を行った。

これらの授業を通して、現在の人間社会の生活様式やものの考え方が、究極的に地球環境の問題と深く関わっていることを認識させ、児童一人一人に「人にやさしく、地球にやさしく」という心を持たせることができた。

地域に学ぶ

大いなる福祉の母「瓜生岩子」

熱塩加納村教育委員会

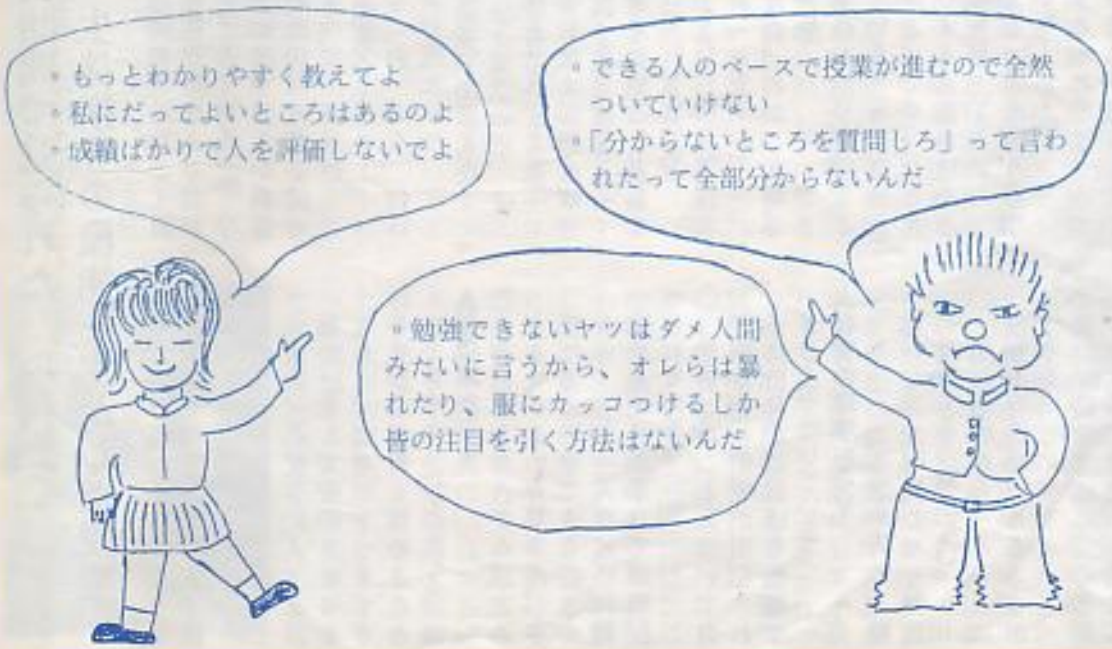
瓜生岩子は今から約一七〇年前の文政十二年当村で生まれた。社会福祉事業の親であり、現在の社会福祉事業は岩子の精神によって進められ今日があるといっても過言でない。旧家で何不自由のない家庭に生まれた岩子が、突然襲った不幸、どん底の生活、その逆境の中から立上がり、戊辰戦争では敵味方ない看護や子供達の為の幼学校設立と本格的に慈善事業を始め、又第一回の日本国議会には女性として初めて社会福祉事業のための請願を行いその後貧民孤児救済、隠胎防止、産婆看護教育、無料医療施設の設立等を実施し、銅像で見られるような柔和で慈愛に満ちた表情からは、どこにあの精力的な働き、勇気ある振舞いが出来たのだろうかと考えさせられるものがある。しかも同じ銅像が東京浅草の浅草寺、福島の長楽寺、喜多方市の佐牟神社そして地元熱塩温泉にある示現寺を含め七ヶ所に建てられているということは日本全国に名をなした業跡のあらわれであり日本のナイチンゲールと称されるゆえんでもあります。

子供の変化に対応する生徒指導

＜子供の心に寄りそった指導を＞

学校では、地域や関係機関との連携を図りながら、登校拒否と非行等の解消を一刻も早く実施しなければならない。

登校拒否や非行等に陥った子供たちの口からは、異口同音に沈痛な訴えが発せられている。特に授業や子供理解・人間関係に関する事柄については、真摯に反省し、一人でも多くの子供たちが教室に戻れるよう改善に努めることが緊急の課題である。



特色ある学校紹介

学校安全教育活動の充実をめざして

会津若松市立双葉小学校

本校は、長年に渡り〝自分の命は自分で守る〟意識を高め、全職員・児童が一体となり、安全教育活動に取り組んできている。

今日、地区の基盤整備や観光地などのため、時期的に車両が増加し、渡地区での事故が年々増える傾向にある。また、冬期間になると吹雪のため登下校の歩行に困難な面が見られる地域でもある。

本校では、この現状をふまえ、学校安全教育計画・学校保健計画に基づき、総合的な安全教育を継続的に実践している。実践の4つの柱は、

(1) 交通安全指導の徹底
(2) 水難事故防止策の強化
(3) 危険箇所の確認と指導
(4) 集団登校時の安全歩行

であり、これらの日常指導を重点活動とし、年2回の「交通安全教室」・地区行事連携の「安全祈願祭（浜開き）」・児童会活動での「危険箇所確認」・6年生が家庭交通安全推進委員となる「登下校の安全歩行推進」活動を中心に推進してきた。また、学校の活動から地域全体の活動とするため、関係機関や団体及びPTAとの連携協力体制を重視し、啓発活動を進めている。

心に残る人々

金山町教育委員会教育長　若林一郎

吉川英治の言葉に「われ以外皆わが師なり」というのがある。若い頃は気にも止めなかったのが、歳のせいか近頃急に切実に感じられる。

そんな中でも、心に残るのは小学校、中学校時代の恩師先生のことであり、社会人となって影響を受けた先輩各位のことである。

退職近くなると、特に職場での思い出が懐かしい。

昭和三十三年、町職員として初めて勤めたのが教育委員会で、当時の教育長は酒井正雄氏であった。直接の上司は後に収入役を務めた長谷川清治氏。長谷川氏とは十年もご一緒し、仲人親をお願いしたり、特別なお世話になって現在に至っている。

酒井教育長からは「若林君お茶と愛情は濃い方がいいんだぞ」と指導を受けた。

その後、教育長は渡部利一郎氏、大友通挙氏、渡部道夫氏と続いて薫陶を受けた。

再び教育委員会に戻った時は須佐憲政教育長。懸案であった学校統合を実現し、実績を残された。

今、大先輩の後をたどりながら「わが師」の重みをかみしめている。

私の作品

河東中学校

左から
五十嵐孝裕「求める手」
川口　正成「喜びにあふれ」
武藤　百合「うえてもとめる」

中学二年生の彫塑による立体表現で、心の内面に目を向けた造形による自己表現をめざした。

絵

「いもざうるす」

喜多方市立岩月幼稚園
うめ組　佐藤絵梨香

自分たちで育てたサツマイモを掘り、「おおきな おおきなおいも」の童話を見て、自分の「いもざうるす」を描きました。「いもざうるす」の親子が、おしゃれをして、お出かけするところです。

習字

「乗馬」

柳津町立柳津小学校六年
佐々木桂子

「まつ」

柳津町立柳津小学校二年
わたなべひろこ

私の抱負

一枚の児童の絵から

会津若松市立鶴城小学校
教諭　須田恵津子

先日、絵画展に出展する作品を選出していた時のこと、先輩の先生が「この絵、すごく深みのある色だな。」と私の目にとまらなかった児童の絵を賞賛された。

普段から落ち着きに欠け、活動も不器用なその児童の絵を、先入観で判断していた所はなかったか、反省させられた。

児童一人一人にはその子なりのよさや可能性が秘められている。教師は、その本質に目を向け、伸ばしていく支援をしていかなければいけない。

今後も日々のふれあいを大切にし、様々な角度から児童に接していきたい。

意を体して

西会津町立西会津中学校
教頭　土井昭一郎

飯豊山の雪化粧が美しく輝くころ、着任の日「教頭の判断で物事を話すこと。」六月「今日で新任は終わりです。」と言う校長の言葉を思い出す。初日から判断力、責任感が問われる職責の重さを痛感した。新任期間は、二ヵ月で終わったが、今まで周りの人々に校長の「意」をどの程度伝えることができただろうかと自責の念に駆られる。十月「教頭らしくなってきた。」と言われる。校長先生、諸先生、生徒達に支えられて「教頭らしく」させていただいたと思う。常に感謝を忘れず、「教頭に」なれるよう誠実に職務を遂行していきたいと思う。

真摯な職員と共に

柳津町立久保田小学校
校長　村岡忠征

（柳津町伝承「琵琶氏族の国ゆずり」からヒントを得て、地域の伝統文化の形成という遠大なる夢を託して）

全職員の涙ぐましい努力の結果、大変な好評を得て、手を取り合って喜びを分かち合った。地区の人々に大きな感動をもたらし児童に自信と誇りを高めたものと自負している。

赴任以来、職員の誠意あふれる姿勢に励まされての毎日であり、日々感謝の連続である。職員の思いを大切にし、精神的支援に全力を尽くしたい。

ダイヤルSOSより

「耳」と「心」を傾けて聴く

会津教育事務所学校アドバイザー　高梨敦子

「ダイヤルSOS」は三年目を迎え、相談内容は多様化している。子ども、親、教師…がダイヤルを回す。おそらくその指は戸惑い、心臓は高鳴っているにちがいない。

電話相談は、互いの姿も見えず「いつ、誰が」の予告なしに「どうした」から始まる。

私たちは相手の話を、ただ誠意と寛容をもって聴くことにまず大きなエネルギーを傾ける。語られる言葉（時には沈黙）から、相手の人格や心の内側をなんとか理解しようと努める。

『傾聴』の目的は、相談者が自らの訴えを通して自分自身で可能性を模索していくことへのサポートである。このことは相談業務の基本であり、的確なアドバイスにつながるものと考える。

耳と心でひたすら聴く。路傍の石にも学びながら、今日も電話に向かう。

生涯学習だより

西会津町の生涯スポーツへの取り組み

西会津町教育委員会派遣社会教育主事　栗城磐

本町は、平成八・九年度文部省「スポーツ活動推進地域の指定事業」を受け、研究の重点に①スポーツ少年団等の育成、野外活動の充実②児童生徒の学校外におけるスポーツ活動の推進方策を挙げ、将来の学校完全週五日制の受け皿を模索しつつ研究を進めているところです。

高齢化・少子化が進んでいる状況の中、地域の担い手になる子供たちに「生きる力」を身につけさせ、生きがいのある生活と活力ある地域づくりを目指し、各種スポーツ教室・ニュースポーツ講習会等を行うなど、スポーツの「楽しみ方」をとおし、生涯スポーツ社会づくりを追求しているところです。

また、福島大学スポーツ社会学研究室の黒須助教授と共に地域の課題の焦点化を図りながら、この春、同大学の公開講座を本町において開催し、好評を博しました。

昨年「自然との対話」と題して講演会を開催し、国立信州高遠少年自然の家所長の松下俱子氏と専門職員の山本仁氏を招き、地域に根ざした野外活動を通して「生きる力」をどのように育んでいくのか、学校・家庭・地域が出来ることを講演を通じて展望しました。それを機会に、冬の厳しい自然の中での「雪中キャンプ」を、この夏には、阿賀川一二キロメートルを六時間かけて手作りイカダで下る「川下りギャザリング」を行ってみました。異年齢の中に身を置き、大自然を前にして子供たちの姿がどんどん素直になっていくのが目に見え不思議な気持ちに捕らわれました。

平成八年度には、新たにスポーツ少年団を一団体設立し、地域の優れた指導者のもと、小・中・高校生が楽しく活動しています。その一つ「さゆりクラブ」は、気軽な気持ちで入会できる複合型の形式をとり、一四八名の団員からのスタートでした。将来、高齢者や女性のグループ等も含めた総合型地域スポーツクラブへと発展するよう努めていきたいと考えています。